

現行の義務教育課程における健康教育カリキュラムの分析

岩野 翼

京都教育大学大学院教育学研究科 din85037@kyokyo-u.ac.jp

キーワード：人体、カリキュラム、健康

(受付：2009年2月3日)

I. はじめに

現行の小学校学習指導要領（文部省，1998a）の第1章総則には「学校における体育・健康に関する指導は，学校の教育活動全体を通して適切に行うものとする。---（中略）---日常生活において適切な体育・健康に関する活動の実践を促し，生涯を通じて健康・安全で活力ある生活を送るための基礎が培われるよう配慮しなければならない。」とある。しかし，現在の義務教育において，“生涯を通じて健康・安全で活力ある生活”を送ることのできる健康教育が充分保障されているのだろうかという疑問を，筆者は強く抱いている。

義務教育における，人体や健康に関わる教育カリキュラムの現状と課題を検討した。第一歩として，日本における，現在の小・中学校における健康教育の内容と，国民の健康実態との関係を，学習指導要領，教科書，及び統計資料を用いて調べた。まず，身近な「食」に着目した。具体的には，「食」ことと「それにひき続く体のはたらき」を担う部位として，消化管，代謝臓器，泌尿器を中心に挙げた。

II. 方法・手順

検討した内容は，学習指導要領の検討，教科書の内容の検討，最新の医療統計データの検討，そして症状の実態についての検討を行なった。それらの検討に用いた資料は以下の通りである（表1）。資料Aは小・中学校の指導要領，資料Bは検定済教科書，資料Cは統計白書，資料Dは医学百科である。

表1 国民の健康実態及び義務教育課程の学習内容を調査・分析するために用いた資料

本論文での呼称	資料名	発行年	発行所	著者
資料A-1	小学校学習指導要領	1998	大蔵省印刷局	文部省
資料A-2	中学校学習指導要領	1998	大蔵省印刷局	文部省
資料B-1	文部科学省検定済教科書 『新版たのしいせいけいかつ』（上下）	2005	大日本図書	東洋ほか
資料B-2	文部科学省検定済教科書 『新版たのしい理科』（3年～6年）	2005	大日本図書	戸田盛和ほか
資料B-3	文部科学省検定済教科書 『新版中学校理科』（1・2分野上下）	2006	大日本図書	戸田盛和ほか

資料 B-4	文部科学省検定済教科書 『新版たのしい保健』 (3年～6年)	2005	大日本図書	大津一義ほか
資料 B-5	文部科学省検定済教科書 『新版中学校保健体育』	2006	大日本図書	高石昌弘ほか
資料 B-6	文部科学省検定済教科書 『新編新しい家庭』 (5・6年)	2007	東京書籍	渋川祥子ほか
資料 B-7	文部科学省検定済教科書 『新編新しい技術・家庭 家庭分野』	2007	東京書籍	加藤幸一ほか
資料 C	『国民衛生の動向・厚生指標・臨時増刊・ 第 52 巻第 9 号 通巻第 816 号』	2006	厚生統計協会	長谷川慧重ほか
資料 D	『症状からみた家庭の医学百科 改定新版』	1985	保健同人社	荒木淑郎ほか

学習指導要領の検討

義務教育における学習の目的の中に、健康教育がどう位置づけられているのかを調べるため、資料 A の教科書の目標における人体に関わる事項を抜き出し、学年ごとに整理した。

教科書の内容についての検討

現代の義務教育において、人体のどういう部位がどのように扱われているのかを調べるため、資料 B で取り上げられている人体に関わる学習内容を抽出し整理した。

医療統計データの検討

体のどの部位が病気に罹りやすいのかを調べるため、資料 C より、死亡率、入院受療率、外来受療率、推計患者数、通院者率のデータを抽出して整理した。

身近に感じる症状の実態についての検討

資料 D より、消化管、代謝臓器、泌尿器に関わる症状を、資料 C より有訴者率※を抜き出して整理した。とくに医療従事者でない私たちにとって、「体のどこかの具合が悪い」、あるいは「どうも調子がよくない」といった場合、体のどこ、どういう病気かを決める手立てをもち得ない。そのため一般的には自覚した症状から判断することが多い。そのことから、具体的な病名よりも自覚症状の方が私たちにとってはより身近であると判断し、ここでは病名ではなく症状に着目した。

【検討項目間の相互関係】

上記の各検討項目間の相互関係についてさらに検討を加えた。具体的には、教科書での学習内容と医療統計データから「国民の健康実態」と「教科書の内容」が相互にどのように対応しているのかを調べ体の部位ごとに整理した。また、身近に感じる症状の実態と学習内容から「症状の実態」と「教科書の内容」が相互にどのように対応しているのかを調べ整理した。

有訴者率※

有訴者とは、世帯員（入院者を除く）のうち病気やけが等で自覚症状のある者をいう。

$$\text{有訴者率} = \frac{\text{通院者数}}{\text{世帯人員}} \times 1000$$

Ⅲ. 結果

次の1～3についてまとめた。それぞれ1. 学習指導要領の目標における健康教育に関わる記述, 2. 国民の健康実態と小・中学校教科書の内容との関係, そして3. 「症状の実態」と「教科書の内容」との対応である。

1. 学習指導要領の目標と健康教育に関わる記述

学習指導要領の全ての科目および教科外の記述も含め, 人体や健康に関わる部分の記述を抜き出した(表2)。その中で, 小・中学校での内容の取り扱いの違いに着目し, それぞれ総則・道徳等, 教科ならびにその内容を扱う学年別について抽出した。

これらを概観すると, 保健体育科, 理科, 特別活動の目標において, 人体および健康に関する項目が記述されているが, 他の科目ではまったく記述がないことがわかる。

表2 現行学習指導要領の目標における健康教育に関わる記述

		健康教育に関わる記述部分
小学校	総則・道徳等	・心身の調和のとれた発達を図る(特別活動)
	教科	・心と体を一体として捉える(体育) ・健康の理解(体育) ・健康の保持増進(体育)
	学年	・健康, 安全に留意(体育3-4年, 5-6年) ・健康の大切さを認識(体育3-4年) ・健康によい生活の仕方の理解(体育3-4年) ・生命を尊重する態度を育てる(理科5年, 6年) ・生命の連続性についての見方, 考え方を養う(理科5年) ・体の調子を整え, 体力を高める(体育5-6年) ・生物の体の働き及び生物と環境との関りについての見方や考え方を養う(理科6年) ・けがの防止, 心の健康及び病気の予防についての理解(体育5-6年) ・健康で安全な生活を営む資質や能力を育てる(体育5-6年)
中学校	総則・道徳等	・心身の調和のとれた発達を図る(特別活動)
	教科	・生物とそれを取り巻く自然の事物, 現象に対する関心を高める(理科) ・生物や生物現象についての観察, 実験を通して, 自らの考えを導きだし表現する能力を育てる(理科) ・植物や動物の生活と種類, 生物の細胞と生殖などについての理解を通して科学的な見方や考え方を養う(理科) ・生物とそれを取り巻く自然の事物・現象を調べる活動を通して, 自然環境を保全し, 生命を尊重する態度を育て, 自然に対する総合的な見方を養う(理科) ・心と体を一体として捉える(保健体育) ・運動や健康・安全についての理解(保健体育) ・運動や健康・安全についての理解(保健体育) ・生物とそれを取り巻く自然の事物・現象を調べる活動を通して, 自然環境を保全し, 生命を尊重する態度を育て, 自然に対する総合的な見方を養う(理科) ・心と体を一体として捉える(保健体育) ・運動や健康・安全についての理解(保健体育) ・健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図る(保健体育) ・生涯を通じて自らの健康を適切に管理し, 改善していく資質や能力を育てる(保健体育)

2. 国民の健康実態と小・中学校教科書の内容との関係

国民の健康実態と小・中学校教科書で扱われている内容について抽出し、表3にまとめた。なお、表中の死亡・罹患の状況については、岩野（2008a）に基づいている。

表3 国民の健康実態と小・中学校教科書の内容

各部位に関わる事項 部位	死亡・罹患の状況 ¹⁾		教科書での取り上げられ方 ²⁾					
	死亡	罹患	名前	位置	形態	機能	病気	何れか ³⁾
消化管	A	A	○	○	○	○	×	○
口	a	A	○	○	○	○	○	○
歯等	-	A	○	○	○	○	○	○
口唇	a	A	×	×	×	×	×	×
咽喉	a	-	×	×	×	×	○	○
咽頭	-	-	×	×	×	×	×	×
喉頭	a	-	×	×	×	×	×	×
食道	A	-	×	×	×	×	○	○
胃腸	A	A	○	○	○	○	○	○
胃	A	a	○	○	○	○	○	○
腸	a	a	○	○	○	○	×	○
小腸	-	-	○	○	○	○	×	○
十二指腸			×	×	×	×	×	×
空腸			×	×	×	×	×	×
回腸			×	×	×	×	×	×
大腸	A	a	○	○	○	×	×	○
盲腸	-	-	×	×	×	×	×	×
虫垂	-	-	×	×	×	×	×	×
結腸	A	a	×	×	×	×	×	×
直腸			×	×	×	×	×	×
肛門	-	-	×	×	×	×	×	×
代謝臓器	A	a	○	○	○	○	×	×
肝臓	a	a	○	○	○	○	×	○
胆嚢	A	-	○	○	×	×	×	○
胆道			×	×	×	×	×	×
膵臓	A	-	○	○	×	○	×	○
泌尿器	a	A	○	○	○	○	○	○
腎臓	a	A	○	○	○	○	○	○
尿管	-	-	○	○	○	×	×	○
膀胱	a	-	○	○	○	○	○	○
尿道	-	-	×	×	×	○	×	○

1) 記号「A」・「a」・「-」

死亡については、一傷病あたりの死亡率の平均値を資料Cより算出し、平均値以上のものを「A」、平均値未満のものを「a」、不明なものを「-」として表現した。

罹患の状況については、入院受療率、外来受療率、通院者率、推計患者数を総合的に見て、患者の多さの度合いを表した。

2) 記号「○」・「×

教科書において、何らかの扱いがある場合には「○」をつけた。

3) 「何れか」は、名前、位置、形態、機能、病気の何れかが、教科書において扱われているかどうかを示す。

上記表 3 を概観すると、実際の死亡者数や患者数が多いにもかかわらず教科書で全く扱われていない体の部位は、口唇、結腸などが上げられる。また教科書で取り上げられてはいるが病気に関して全く触れられていない体の部位は、小腸や大腸などである。さらに教科書で病気については触れられているが、機能等について扱われていない体の部位は、咽喉、食道などとなっている。このように、教科書で扱われている内容と私たちが日頃経験している疾患とは大きくかけ離れていることがわかる。

3. 「症状の実態」と「教科書の内容」の対応

日常的に感じる自覚症状の実態と教科書で取り扱われている内容との対応を抽出して以下にまとめた (表 4)。

表 4 よくある自覚症状と小・中学校教科書における症状に関する学習内容

日常的に感じる自覚症状		有訴者率		教科書に見られる症状	
		総数	0～24 歳	小学校	中学校
口内や舌	口が大きく開かない				
	口が大きく開いたままになる				
	口元の締めりが悪い				
	口がくさい				
	のどが渇く				
	唾液が多くて困る				
	食べ物の味が分らない				
	唇の色が悪い				
	唇が腫れる				
	唇が荒れる				
	口内が荒れて痛い				
	口内にしこりとこぶができる				
	口から出血する				
	舌の表面の色が変わる				
	舌がもつれる				
	舌にこけができる				
歯	歯が痛い	a (20.9)	A (33.8)		
	歯茎の腫れ・出血	a (21.2)	a (13.0)	歯周病による出血 (保健 5, 6 年)	
	歯茎の色, 形が悪い				
	歯がしみる				
	歯がうく				
	歯の色, 形の異常				
	歯のはえるのが遅い				
	かみにくい	a (20.8)	a (4.8)		
のど	のみこむのが困難になる				
	しゃっくりがとまらない				
	のどが痛い				
	声がかすれる				
	いびきをかく				
胸部	胸が痛い (前胸部に痛みがある)			シンナーの害による食道からの出血 (保健 5, 6 年)	

腹部	腹痛・胃痛	a (20.8)	A (40.9)		
	食道がつかえる				
	胸やけがする	a (27.5)	a (13.8)		
	胃がもたれる				
	血を吐く（吐血）			シンナーの害による胃からの出血（保健 5, 6 年）	
	げっぷが出る				
	吐く，吐き気がする				
	腹がふくれる				
	腹にしこりができる				
排便	便秘をする	A (35.2)	a (35.1)		
	便の回数が多い				
	下痢をする	a (15.8)	A (42.8)		
	便が黒くなる				
	便に血が混じる				
	便が出にくい				
	乳児の下痢				
	乳児の便の異常				
	肛門がかゆい				
	肛門が痛い	a (8.6)	a (4.2)		
	肛門から出血する				
	肛門から何かが出る				
	排便時に肛門が痛い				
排尿	尿が近い（頻尿）	a (24.1)	a (4.3)		
	尿の量が多い				
	尿が少ししか出ない				
	尿が出にくい	a (8.5)	a (2.1)		
	排尿時に痛む				
	尿が濁る				
	尿に血が混じる（血尿）				
	尿失禁（無意識の排尿）	a (10.6)	a (1.3)		
他	食欲不振	a (9.9)	a (17.6)		
全身的				飲酒による歩行困難等の影響（保健 5, 6 年） 短時間の大量飲酒による死亡の恐れ（保健 5, 6 年）	飲酒による思考力，自制力の低下及び運動への支障（保健体育） 大量飲酒による急性中毒・死亡等の恐れ（保健体育）

記号「A」・「a」

一傷病あたりの有訴者率を資料 C より抽出してその平均値をもとめ，その平均値以上のものを「A」，平均値未満のものを「a」として表現した。

上記表 4 を概観すると，全教科を通し私たちが日常的に感じる症状は表の左欄に示すように多種多様であるにも関わらず，実際には表の右欄に見られるように教科書では症状についての記述はほぼ空欄の状態であることがわかる。つまり，教科書においては症状につ

いてほとんど扱っていないということである。

また、小・中学校で扱われている具体的な症例内容を見てみると、歯に関する自覚症状では歯周病による出血について小学校 5・6 年生の保健の教科書に記述がある。また同教科書には胸部ならびに腹部に関する自覚症状として、シンナーの害による食道や胃からの出血に関する記述がある。中学校で扱う教科書にはそれらの記述は見られない。全身的な症例として飲酒による歩行困難や大量飲酒による死亡の可能性について記述があるが、これらについては、小・中学校とも保健ならびに保健体育の内容として取り扱われている。

IV. 考察

上記を受けてここに若干の考察を行い、以下にカリキュラムの現状と健康教育カリキュラム再編への期待として提言を行なう。

学習指導要領の目標と健康教育に関わる記述に関して、すべての教科で人体や健康に関わる内容を取り上げることは現状では難しいし、様々な教科で扱うことで生じてくる問題も懸念される。現在は保健体育科、理科、特別活動においてのみ取り扱われている内容であり、これだけで決して十分とはいえない。しかしながら、詳細に内容について吟味してみると、細かな点では問題や不足感もないわけではないが、保健体育科、理科、特別活動で扱われている内容としては、現項目でほぼ概ねは満たされていると考えられる。

また、国民の健康実態と小・中学校教科書の内容との関係では、私たちが罹りやすい病気と教科書で取り扱われている学習内容にはあまり関連性がなく、生活実態と教科書での取扱いに大きなひらきを感じずにはいられない。学習指導要領に掲げている目標では、「生涯を通じて健康・安全で活力ある生活を送るための基礎が培われるよう配慮しなければならない」とあるが、教科書の内容を見てみると実際の病気に配慮した内容とはほど遠いと考えられる。

「症状の実態」と「教科書の内容」との対応については、痛みの症状として私たちがよく経験する虫歯や歯周病に関するものについては、実態と非常に合っていると考えられる。その一方で、小学校 5, 6 年生の保健で扱われている胸部・腹部の痛みとして、「シンナーにより食道や胃からの出血による痛み」が原因としてあげられているが、一般的にはこのことの妥当性が非常に考え難いところである。それほどまでに現状では小学生にシンナーの害が及んでいることの表れなのかもしれない。また、現実には即した病気として考えられる悪性新生物や潰瘍等と関係の深い症状の記述は見られなかった。

日本のカリキュラムの現状

現行の教科書における人体に関する内容の取り上げられ方は、現代の健康実態と大きくかけ離れたものとなっていることが本研究により明らかになった。これで、指導要領が示す“学校教育全体を通じての健康教育”が十分であると言えるのだろうか。人体について最も深く学習を行なう理科にあっても、科学的思考力を重視する一方で健康教育の視点の欠けたカリキュラム編成となっている。これで本当に子どもたちにとって意味をなすカリキュラムと言えるのだろうか。実生活・実社会に生きる力を養うためにも、従来の教科教育としての系統性だけでなく、健康に関わる内容に関し、その全体像の構築、即ち健康教育カリキュラムとしての系統性が、これからの重要な課題と言えるのではないだろうか。

健康教育カリキュラム再編への期待

現行の学習指導要領（文部省，1998a, b）において「学校における体育・健康に関する指導は，学校の教育活動全体を通じて適切に行うものとする。」と記されている。そこで，全教科・科目について，この「健康」に関する学習項目を授業計画に盛り込むのというのはどうか。文部科学省の「学校教育活動全体の中で健康教育を行う」という理念が満たされることになる。

ある1つの物事について，多様な観点から関連するさまざまな情報を関連付けるような教育である。これが今の日本に求められているのではないだろうか。もし，上記のように「健康」をさまざまな科目で扱う場合，それらを結ぶ接着剤のような役割を理科が担うべきではないかと考える。健康に関する事項を全教科で扱うだけでは，日常生活に生きる実用的な知識にはなりにくいからである。私たちの身に起こる病気や症状を，人体を深く学ぶ理科において理論立てて学習する必要があるのではないだろうか。

人体に関して学習する目的は，より健康に生きるために，そして，周囲の人のことをより理解するためにあると筆者は考えている。人体に関する知識を科学的思考力獲得のための手段に終わらせるのではなく，子どもたち自身や身のまわりの人々が日常生活において罹る可能性の高い疾患と結び付ける工夫が必要ではないか。そうすれば「実社会や実生活との関連」に気づくことができ，「人体への関心」を高めることにもつながる。人体を学ぶことの意義や有用性を実感する機会を持たせる観点から，実社会・実生活との関連を重視する内容を充実させるのである。「今自分が学んでいることが，実生活や実社会とどのようにつながっているのか」に気づけるような学習が必要なのではないだろうか。

情報が溢れる現代社会において，健康や病気に関する科学的知識・見方を養うためにも，義務教育である小・中学校からの系統立てた健康教育が求められている。今後，健康教育カリキュラム再編成を検討する上で，少なくとも①国民の健康実態に合った学習内容を扱う，とともに②病名について扱う以前に症状について扱う，などの配慮が必要である。

これらのことを配慮した上で，以下に4つの提案を行なう。

- クロス・カリキュラム（全科目で共通のテーマを掲げる）を導入し，そのテーマの1つに「健康」を含める。
- 従来の教科とは別に，新たな教科「健康科」を設置する。
- 総合的学習の時間に様々な科目の教師が協力して，健康に関するコラボレーション授業を行う。
- 病院などの医療施設と教育現場との連携を行なう。

などである。これらは考えられる手段の本の一部であり，今後，私たちの健康実態を考慮に入れ，健康に対する基本理念の再検討により，学び手にとって本来の学びの在り方を探っていきたい。

V. おわりに

平成24年度からの新学習指導要領で，中学校の保健体育科に「薬教育」が新たに加わる。コンビニエンス・ストアやネット通販などでOTC（市販）薬が簡単に買える時代である。たくさんの情報が溢れる中で，子どもたちへの健康教育の重要性はますます高まって

いる。ただ単に教授・学習内容の取捨選択に焦点を当てるのではなく、「なぜ学ぶのか」という学ぶ意義や哲学的原理を考え直す時期を迎えているのではないかと筆者は考えている。最後に、原稿の校閲をして下さいました京都教育大学の広木正紀教授に感謝いたします。

文献

- 東 洋 ほか 17 名 2005. 新版たのしいせいかつ上. 大日本図書, 93pp. 東京.
- 東 洋 ほか 17 名 2005. 新版たのしいせいかつ下. 大日本図書, 97pp. 東京.
- 荒木淑郎 ほか 67 名 1985. 症状からみた家庭の医学百科 改定新版. 保健同人社, 1278pp. 東京.
- 長谷川慧重 ほか 25 名 2006. 国民衛生の動向・厚生指標・臨時増刊, (52 - 9) 816, 厚生統計協会, 495pp. 東京.
- 広木正紀 2007. 「環境教育の視点」と「探究学習の視点」を大切にしたい学習内容づくり - 「自然観の育ち」と「学習観の育ち」を願って -. 日本理科教育学会・第 57 回全国大会愛知大会・発表論文集, p.413.
- 岩野 翼 2007. 小・中学校の健康教育の視点からの分析 - 理科・生活科・保健体育科に着目して -. 平成 19 年度日本理科教育学会・近畿支部大会・発表論文集, p.55.
- 岩野 翼 2008a. 現行の義務教育課程における健康教育カリキュラムの分析. 京都教育大学 2007 年度卒業論文.
- 岩野 翼 2008b. 現行の義務教育課程における健康教育カリキュラムの分析. 平成 20 年度日本理科教育学会・全国大会・発表論文集, p.325.
- 加藤幸一 ほか 50 名 2007. 新編新しい技術・家庭 家庭分野. 東京書籍, 241pp. 東京.
- 文部省 1998a. 小学校学習指導要領. 大蔵省印刷局, 97pp.
- 文部省 1998b. 中学校学習指導要領. 大蔵省印刷局, 104pp.
- 大津一義 ほか 12 名 2005. 新版たのしい保健 3・4 年. 大日本図書, 27pp. 東京.
- 大津一義 ほか 12 名 2005. 新版たのしい保健 5・6 年. 大日本図書, 41pp. 東京.
- 渋川祥子 ほか 11 名 2007. 新編新しい家庭 5・6 年. 東京書籍, 100pp. 東京.
- 高石昌弘 ほか 21 名 2006. 新版中学校保健体育. 大日本図書, 153pp. 東京.
- 戸田盛和 ほか 47 名 2005. 新版たのしい理科 3 年. 大日本図書, 100pp. 東京.
- 戸田盛和 ほか 47 名 2005. 新版たのしい理科 4 年上. 大日本図書, 68pp. 東京.
- 戸田盛和 ほか 47 名 2005. 新版たのしい理科 4 年下. 大日本図書, 76pp. 東京.
- 戸田盛和 ほか 47 名 2005. 新版たのしい理科 5 年上. 大日本図書, 72pp. 東京.
- 戸田盛和 ほか 47 名 2005. 新版たのしい理科 5 年下. 大日本図書, 76pp. 東京.
- 戸田盛和 ほか 47 名 2005. 新版たのしい理科 6 年上. 大日本図書, 72pp. 東京.
- 戸田盛和 ほか 47 名 2005. 新版たのしい理科 6 年下. 大日本図書, 66pp. 東京.
- 戸田盛和 ほか 48 名 2006. 新版中学校理科 1 分野上. 大日本図書, 159pp. 東京.
- 戸田盛和 ほか 48 名 2006. 新版中学校理科 1 分野下. 大日本図書, 137pp. 東京.
- 戸田盛和 ほか 48 名 2006. 新版中学校理科 2 分野上. 大日本図書, 149pp. 東京.
- 戸田盛和 ほか 48 名 2006. 新版中学校理科 2 分野下. 大日本図書, 139pp. 東京.